

授業探訪

言語系科目・言語 B 自由科目

韓国の大学とのコラボレーションで学生の主体性を育て好奇心を育む「朝鮮語演習 2」の実践

全学共通教育カリキュラム運営センター兼任講師 金 鉉洙
外国語教育研究センター教授 佐々木 正徳

1. 朝鮮語新カリキュラムにおける「朝鮮語演習 1・2」の位置づけ

2024 年度からスタートした言語 B の新カリキュラムでは自由科目を「留学準備領域」「プロジェクト領域」「キャリア領域」「アカデミック領域」の 4 領域に区分して展開している。このうち、どのような授業が展開されているかイメージがもっとも浮かびづらいのが「プロジェクト領域」ではないだろうか。本領域はさまざまな授業活動によって能動的に言語を学びながら、当該言語が使用される文化圏や社会に関する教養を深めることを目指す科目群である。つまり、言語を学ぶことは当然として、学習している言語が話されている地域の情報をより意識的に取り扱うことで、履修者たちが複言語・複文化的眼差しを獲得できるようにしようという試みである。言語学習と文化・社会環境との接続は当然これまでのカリキュラムでも行われてきたことであるが、それを教員も学生もより重要な要素として意識し学んでいくということである。また、本領域で展開される科目はより高度な言語運用能力を養う「キャリア領域」や「アカデミック領域」を受講するための準備段階として位置づけられているのはもちろん、上級水準に到達することを目指しているわけではないがもう少し詳しく言語を学びたい層、言語だけではなくその言語が使用されている地域の文化や社会のことをより詳しく知りたい層、現状の語学力を維持したい層など、多様なニーズに対応する授業を開講していることも特徴である。そのため、学びたくなったとき、専門を学び進める中で必要となったとき、時間的余裕ができたときなど、個々人のタイミングで受講することが可能な科目が展開されている。

上記の性質を持つ「プロジェクト領域」の科目として、朝鮮語では「朝鮮語演習 1・2・3・4」を設定している。このうち、2024 年度から開講しているのは「朝鮮語演習 1・2」の 2 科目である（「朝鮮語演習 3・4」は 2025 年度から開講される）。「演習 1」については必修科目を学修した学生を、「演習 2」は「演習 1」の学修者を主対象としている。朝鮮語科目においては、「プロジェクト領域」の科目群が自由科目の中でも新カリキュラムの特長が色濃く出る領域とみなしており、特に「朝鮮語演習 1・2」については担当教員が工夫を凝らして「朝鮮語圏の文化や社会に関する教養」を深めうる実践を提供している。「朝鮮語演習 1」は池袋キャンパスでは春学期と秋学期に 1 クラス

ずつ、新座キャンパスでは春学期に 1 クラス、計 3 クラスがいずれも異なる教員によって開講されている。また、「朝鮮語演習 2」は池袋キャンパス・新座キャンパスともに秋学期に 1 クラスずつ開講されていて、春学期に「朝鮮語演習 1」をそれぞれのキャンパスで担当していた教員が引き続き担当している。本稿ではこれらのうち新座キャンパスで金鉉洙先生によって開講されていた「朝鮮語演習 2」の授業実践を紹介する。

金鉉洙先生の授業では韓国の大学生と交流する機会が設定されており、学生たちは交流の準備を通して朝鮮語能力の向上と韓国文化・社会についての理解を深めていく。つまり、韓国の文化や社会に関する教養の深化と、朝鮮語のアウトプット能力の向上という二つの目標を、現地の学生たちとの交流というアクティブな実践を軸に達成しようという非常に意欲的な取り組みなのである。学習の成果はオンラインで受講生が見られるように公開されるなど、事後の対応も含め本授業から他の教員が学ぶことは多い。

今回、韓国の大学との交流が実現した背景には、オンライン授業の環境が整ってきたことや教員・学生がオンラインでのやりとりに慣れてきたことなど、インフラ面と心理面、双方の環境が整ってきたことは見逃せない。こうしたタイミングで他者理解の一つの手段として複言語・複文化主義の意義をうたう言語 B の新カリキュラムが胎動したことは偶然とはいえ幸運なことであった。

2. 新座キャンパス「朝鮮語演習 2」の授業実践

ここでは「朝鮮語演習 2」における交流授業の企画の経緯と概要、今後の課題について述べたい。

(1) 企画の経緯

交流授業を企画するに至ったきっかけは前述したオンライン授業の環境が整ってきたことの他に概ね二つあげられる。一つ目は、「朝鮮語圏の文化や社会に関する教養」やアウトプットがより重視される新カリキュラムの実施により、授業担当者がオリジナリティを発揮する余地が増えたこと。二つ目は、現代韓国の大衆文化は世界的に拡散しており、日本においても韓国大衆文化に興味を持っている学生が少なくないことである。このような背景から、語学を生かしながら異文化理解を深化させるための授業運営ができないかという問いから交流授業を企画することにした。

(2) 概要

交流授業は、韓国の祥明大学校韓日文化コンテンツ学科の「映像コンテンツ制作と韓日文化交流」科目の受講生 25 名と「朝鮮語演習 2」の受講生 22 名がそれぞれ 6 つのグループに分かれ、相手国の言語で報告・討論することを前提とし Zoom を用いて実施した。韓国側はソウル市の鍾路（チョンノ）区をテーマに日本人向けのショット動画を作成することを目標とし、日本側は韓国大衆文化に関する受講生の関心によってテ-

マを設定し、朝鮮語で報告と質疑応答に臨むことにした。当初4回の交流授業を企画していたが、語学能力を涵養しながら報告準備をするため時間的な制約や受講生の負担が大きく、韓国側2回、日本側1回の計3回に変更した。なお、限られた時間内に報告と討論、学生同士の交流を実施するため、報告動画や報告に対するアンケート（感想・質問など）は交流授業の前に終わらせ、お互いにその内容を共有することで時間を効率的に使うことにした。各回の交流授業の内容や様子は次の通りである。

1) 第1回交流授業（2024年10月8日実施）

1回目の交流授業では韓国側から日本人向けに鐘路を如何に紹介するかについての企画報告が行われた。各グループ3分程度の報告動画が事前にYouTubeにアップロードされ、本学学生が視聴しアンケートを作成した。前半の50分は、報告動画を視聴し、事前に共有したアンケートを元に学生同士の討論を行った。そして、後半の50分はZoomのブレイクアウトルーム機能を使ってグループごとに少人数で報告内容に関する討論や身近な話題について自由に話し合う時間を設けた。学生同士の交流では韓国側の学生の日本語レベルの高さに圧倒され、本学の学生が消極的になったように見えた。日本語で会話することが多く、朝鮮語を生かす様子はあまり見られなかった。この点を改善すべく、本学の受講生と話し合い、次回交流授業では必ず一人一回は朝鮮語で話してみることを決めた。

2) 第2回交流授業（同年11月12日実施）

2回目の交流授業では韓国側の最終報告（1分のショット動画）を行った。交流授業当日までの手順と当日の流れは第1回交流授業と同様であった。韓国側の最終報告は「リベカの韓国留学日記」、「鐘路の老舗：楽園餅屋」、「君に伝えたい街、鐘路（幸運の手紙）」、「孤独のグルメ in 鍾路」、「鍾路コア」、「懐かしいのは君だろうか鐘路だろうか」の六つのショット動画で構成されていた。なお、1回目の交流授業で課題であった使用言語の問題は、本学学生がより積極的に朝鮮語を使うことで、お互いに相手国の言語を使った会話が進められるようになった。教室のあちこちで笑い声もおこり、受講生の満足度も高かった。

3) 第3回交流授業（同年12月17日実施）

3回目の交流授業では本学の学生による報告と討論が行われた。報告内容により集中するためにこれまで後半に実施してきた自由に話し合う時間は設けず、討論の時間を確保することにした。各グループは5分程度の報告動画を作成した。その内容は日韓の「マクドナルド」、「学校生活」、「ドラマジャンル」、「K-pop と J-pop」、「カレー」の比較と、「K-pop 4 大事務所」について調べたものであった。報告PPTは朝鮮語で作成し、全員が分担して朝鮮語で報告した。韓国側のコメントや質問は事前に受け付け、それに対するリプライはグループの中で担当者を決め、当日の討論を準備した。交流授業の当



図. 日本側の報告資料

日には、事前に受け付けた質問の他にも質問が続き、その場で日韓の学生が相手国の言語を使って討論を続けた。

3 回目の交流授業の後は、本学の学生同士がお互いの報告について長所や短所を記入しながら評価をするアンケートを作成し、その結果を成績に一部反映することにした。アンケートでは各報告の問題点を的確に指摘しながらも、新しい発見が多く知的好奇心が刺激されたことがうかがえる内容が述べられていた。

(3) 今後の課題

今回の交流授業を準備しながら、もっとも問題と感じたのは新たな表現に習熟することと報告準備を並行する際の時間配分であった。当初の計画は、授業の前半の 50 ～ 60 分を表現練習に、後半の 40 ～ 50 分を交流授業の報告準備時間として設定していた。報告準備においては毎回議論した内容と今後の課題について簡単な報告書を作成してもらい、やったことや今後やることを明確にした。しかし、議論を深めるには設けられた時間が短く効率が悪いことが授業を進めていく中で判明した。そのため、受講生と相談し授業を前後半に分けることをやめ、最終報告の直前の授業を報告準備の時間として活用することにした。今後は授業内の時間配分についてはより工夫が必要と感じた。今回の経験を生かしてグループ分けやテーマの設定、基礎的な資料の調査は表現練習とともに行い、報告動画等の作成には集中的に時間を設けることで対応していきたい。

「朝鮮語演習 2」のレベル設定上、交流授業は報告内容の質よりも、朝鮮語で報告し討論にチャレンジするというのがメインとなる。しかし、ある程度の語学能力が担保されれば、オンライン授業の環境が整ってきたことを最大限に生かし、日韓の学生同士が相手国の言語を使いながら毎回議論を深め(語学力を生かし)、共同の成果物を作り(異文化理解を深め)、それを YouTube の Live 放送の機能を使って世界に発信する場を設けることも可能ではないかと考えている。こうした試みが実践できれば、外国語を学ぶ

＝世界と繋がるということがどういうことであるか、学生たちは身をもって経験することができ、複文化的思考の醸成に大きく寄与できるのではないかと確信している。

きむ ひょんす
ささき まさのり